

「いたづらに咲き匂ふ」花の系譜

岩崎雅彦

世阿弥は『風姿花伝』第三「問答条々」の第四項で、役者が観客の目を意識することの重要性を説いている。

物数をば似せたりとも、花のあるやうを知らざらんは、花咲かぬ時の草木を集めて見んがごとし。(中略)されば主の心には、随分花ありと思へども、人の目に見ゆるる公案なからんは、田舎の花・藪梅などの、いたづらに咲き匂はんがごとし。

観客を感動させるには、技術的にうまく演じるだけでは不十分で、「人の目に見ゆるる公案」すなわち、芸の面白さを観客に伝える工夫が必要である。そうした工夫をしない役者は、例えて言えば、田舎に咲く桜や野山に自生する藪梅などが、花自体はきれいに咲いていても、人目に触れることがないので、その存在が知られないのと同じである。世阿弥は、この観客に面白さを伝える工夫を「花の公案」と名付け、次のように述べる。

たとひ随分極めたる上手・名人なりとも、この花の公案なからん為手は、上手にては通るとも、花は後まではあるまじきなり。

「田舎の花」「藪梅」は、花の公案を持たぬ

役者の比喻で、人目につかぬ場所で咲いていることを、観客に面白さを伝える工夫をしないことに例える。「いたづらに咲き匂ふ」という表現は、せっかく素晴らしい芸を持つていながら、それが観客に伝わらないことのもつたいなさを示す。この田舎の花に対して、多くの人が見に訪れる都の花は、花の公案を極めた上手な役者の比喻ということになる。人に見られることなく咲く花は、和歌に多く詠まれてきた。『万葉集』巻二(二二二)の笠金村の歌は、志貴親王の死を悼んで詠まれたものである。

高円の野辺の秋萩いたづらに
咲きか散るらむ見る人なしに

志貴親王が生前眺めた高円の野辺の秋萩が、今は見られることなく咲く様子を詠んでいるが、「いたづらに咲き」という表現が『風姿花伝』と一致する。同じく『万葉集』巻十(二八六三番)の作者不明歌

去年咲きし久木今咲くいたづらに

土にか落ちむ見る人なしに
同じく巻十五(二七七九番)の中臣宅守の歌
わが宿の花橘はいたづらに

散りか過ぐらむ見る人なしに
等、「見る人なしに」「いたづらに」咲く花を惜しむ表現が見られる。中でも巻十(二八六七番)の作者不明歌

阿保山の桜の花は今日もかも
散り乱るらむ見る人なしに

は、見る人のない桜の花を詠んだものとして、以降の一連の歌の先駆けとなるものである。これは人に見られることなく咲いて散る桜を、頭の中に思い浮かべて詠んだ歌で、作者の桜を惜しむ気持ちが表されている。

『古今集』春・上(六八番)の伊勢の歌
見る人もなき山里の桜花

ほかの散りなむ後ぞ咲かまし
は、この種の歌の中で最も有名なものである。『続千載集』春・下(二七六番)の大江千里の歌は漢詩を題にして詠まれたものである。

落尽閑花不見人といへる心を
跡たえてしづけき宿に咲く花の
散り果つるまで見る人ぞなき

これは訪れる人のない宿に咲く花を詠んだ歌である。『新拾遺集』春・下(二六九番)の具平親王の歌は旧宅に咲く桜を詠む。

六条の家の今は野のやうになりたるに、桜のいと面白く咲きたりけるを、源為善朝臣折り持て来りければ、よめる

いたづらに咲きて散りぬる桜花

昔の春のしるしなりけり
この歌は在原業平の「月やあらぬ」の歌を本歌とし、懐旧を表現している。

『基俊集』(十一、十二番)の歌の応答には、藤原師実の死後、藤原基俊が山寺で一人花を眺め、藤原公実に歌を送ったことが詞書に記される。

さきのおほいまうち君うせたまひて、
春花のいと面白く咲きたれど、見る人も
侍らざりしかば、ひとり山寺にまかりて、
暮るるまで眺めて、三条大納言のもとにつかはしける

この春は人もすさめぬ山桜
心惜しくや年に散りぬる

返し
聞くにこそいとど惜しさはまさりけれ

見る人なしに花の散るらむ
なお、『風姿花伝』の「いたづらに咲き匂はん」に近い用例としては、『夫木和歌抄』春・六二〇八二に載る権僧正公朝の歌がある。

いたづらに咲き匂ふらし大井川
みゆきにあひし岸の山吹

また、頓阿の『草庵集』(二三一一番)
たがために咲き匂ふらむ盛りとて

人もこじまの山吹の花

は、『古今集』春・下(百二十一番)の読人知らず「今もかも咲き匂ふらむたちばなの小島の崎の山吹の花」を本歌とし、「小島」と「来じ」を掛ける。

『大式高遠集』(四十番)の藤原高遠の歌は、都人に見られぬ花を詠む。

人の家のあるじばかりあるに、花のいと面白く咲きたるを見て
いたづらに咲きつる花か都人

通ふともなき宿のあたりに

この歌の発想は、都と田舎を対比させた『風姿花伝』の表現に通じるものがある。

待宵の小侍従の名で知られ、『平家物語』にも登場する女流歌人の歌にも同様の発想が見られる(『太皇太后宮小侍従集』二十九番)。

いたづらに咲きてや散らむ山賊の
身の卯の花は折りも知らねば

これまで挙げた歌には、いずれも人目に触れることなく咲く花を惜しむ気持ちが表示されている。静けさの中に咲く花は、その美しさをいっそう際立たせる。それは多くの見物客で賑う花に比べて価値が劣るわけではない。閑寂と華麗の巧みな組み合わせは、むしろ高度な美意識を体現している。

『風姿花伝』では、花の公案を持たぬ役者(田舎の花)は、それを持つ役者(都の花)より劣ると述べる。これは理論を明快に説明するための比喩である。世阿弥はここで和歌の伝統的な表現を踏まえてはいるが、人目に触れぬ花に価値を見出す和歌の発想とは異なり、対比・優劣を論じる『風姿花伝』の論旨の上では、田舎の花は価値が劣るという位置づけになる。その一方で、「田舎の花・薔梅などの、いたづらに咲き匂はんがごとし」という記述は、大変に味わい深く、文学的価値の高い表現と言えるだろう。「田舎の花」「薔梅」という語は、いずれも和歌では使われない言葉である。これらの言葉と「いたづらに咲く」という和歌の伝統的表現の組み合わせが絶妙な効果を生んでいると言えるだろう。

これまで挙げた和歌は、いずれも花の咲く情景を詠んだものだが、見られることのない花をわが身の不遇になぞらえて詠まれた歌もある。『古今集』春・下(七十四番)の惟喬これたかのみこ親王の歌は、僧正遍昭に贈ったものである。

桜花散らば散らなむ散らずとて
古里人の来ても見なくに

弟の惟仁(後の清和天皇)との位争いに敗れ、小野の里で失意のうちに暮らす惟喬が、旧知の遍昭に来訪を期待して詠んだ歌である。

『続拾遺集』春・下(八十六番)は、左大臣九条道家が、八重桜の枝に付けて藤原定家に贈った歌である。見られることのない八重桜を、能力・資格がありながらくすぶっている自分の状態に例えている。

いたづらに見る人もなき八重桜
宿から春やよそに過ぎなん

これに対する道家の返歌(『拾遺愚草』二一八四番)は、次のようなものであった。

八重桜宿の盛りの近ければ
この春の日ぞ光そふらん

道家は道家の栄進を予言し、励ましている。不遇な人を、見られることのない花になぞらえたこれらの表現は、役者を花に例えた『風姿花伝』の比喩に通じるものがある。

「田舎の花・薔梅などの、いたづらに咲き匂はんがごとし」という記述の背景には、以上のような和歌の発想と表現が存在していた。

(国学院大学非常勤講師)